

日本近代文学会 関西支部 会報 第十三号

関西支部事務局 09・8・30

★支部大会研究発表題目

◎二〇〇八年秋季大会

「11月8日 於・近畿大学」

- ・矛盾の共存——宮本百合子一九三〇年代作品の諸相——

池田啓悟（立命館大学大学院）

- ・三島由紀夫「親切的な機械」論——事件の虚構化をめぐって——

田中裕也（同志社大学大学院）

（特集）

樋口一葉——縛られた「一葉」、放たれる（テキスト）——

- ・「われから」をめぐって

小森陽一（東京大学）

- ・〈肖像〉へのまなざし——鏑木清方『一葉』の位相——

笹尾佳代（同志社大学大学院）

- ・「にこりえ」再考——映画「にこりえ」を補助線として——

山本欣司（弘前大学）

- ・『十三夜』の構成——《つとめ》を視座として——

水野亜紀子（大阪大学大学院）

- ・「コンタクト・ゾーン」における女性主体——『にこりえ』と『ラマン』——

佐伯順子（同志社大学）

◎二〇〇九年春季大会

「6月13日 於・近畿大学」

（シンポジウム）

支部創設30周年記念・シンポジウム
文学研究における継承と断絶

——関西支部草創期から見返す——

- ・司会・デイスカッサント

浅野洋（近畿大学）

太田登（国立台湾大学）

田中勲儀（同志社大学）

- ・文学研究の発想

谷沢永一（関西大学名誉教授）

- ・文学史研究における継承と断絶

——関西支部30周年のテーマに寄せて——

平岡敏夫（筑波大学名誉教授）

★支部大会印象記

二〇〇八年秋季大会印象記

午前の部一人目、池田啓悟氏「矛盾の共存——宮本百合子一九三〇年代作品の諸相——」は、これまで論じられることの少なかったという一九三二年から一九三五年にかけて書かれた『鋪

道』『小祝の一家』『乳房』の三作品を扱ったものであった。「中條百合子」から「宮本百合子」への改名に至るこの時期の三作品に特有のフアクターとして、池田氏は女性労働の問題を指摘し、政治と女性労働という二つの要素が矛盾しながらも共存するせめぎ合いを軸に、前記三作品の配置を示した。

個々の作品の言説に即して、百合子の意図とは別に生起し得る読みの可能性を示そうとされたのである。この意図は、発表がやや早口だったこともあり、少し伝わりにくかったように思う。質問に応じる中で出た改稿の問題や、同時代評など作品周辺の言説を踏まえたかたちで、個々の作品評価をもう少し伺いたく思った。

つづく田中裕也氏「三島由紀夫『親切的な機械』論——事件の虚構化をめぐって——」は、作品を生成論的なアプローチから論じたもの。田中氏は、『親切的な機械』のもとになった京大生の女学生殺人事件についての情報を三島が得た京都来訪が昭和二十四年五月二日から十三日の間に特定できること、

また、『親切的な機械』の「後記」に記された「先日の京都旅行で得た新資料」が、先行研究で指摘されていた警察調査ではなく、京都日日新聞社発行の雑誌『愛』における「青年特集 青春の論理座談会」であることを明らかにした。この座談会をふまえ、氏は作中の猪口を「超人」として造型されていることを指摘し、三島のニーチェ哲学受容が作品に深く関わっていたことを明らかにした。

田中氏の発表は、綿密な資料調査に

裏付けられた堅実な研究であったため、氏の明らかにした新情報がいかに『親切的な機械』という作品内容の読みを更新するのかが、もう少し伺いたく思った。三島の京都旅行が昭和二十四年五月に行われたものであるとするという新情報によって、既に執筆し終えていた『仮面の告白』との関わりを考えられるのではないかと、という佐藤秀明氏の指摘や、作品の典拠（和辻哲郎『ニイチェ研究』）を指摘した上で、なぜ三島が特にその部分を作品に用いたのか、など、これからの展開を期待させる発表であった。

（久保明恵）

午後の部は、「特集・樋口一葉——縛られた「一葉」、放たれる（テキスト）——」であった。様々なイメージに縛られてきた一葉の文学を、新たにとらえ直すことは可能か、という意図で企画された特集であった。全部で五つの発表があったが、前半三つの発表について少し述べる。

最初は、小森陽一氏「『われから』をめぐって」であった。現在、派遣や、心の病を抱える二、三十代女性の間で、一葉小説が「蟹工船」と共にブームになってきているという。例えば、借金を身体で返せと迫られた女性が、「たけくらべ」の美登利に自分を重ねているのだという。実際にそういった人々との話を続けてこられた小森氏ならではの生々しい話であり、衝撃を受けた。小森氏は、「われから」の最後で、恭助をにらむお町の姿は、労働法が守られなくなるなかで、今、貧困に抗し

て立ち上がっている人々の姿に重なる指摘された。「われから」では、明治における階級の組み替えのなかで美尾の出奔が起きており、民法の家イデオロギーへの後退、西欧的女子教育から良妻賢母教育への転換を背景に、お町が闘い始めていくことを述べられた。今の時代と切り結び、明治以降の思想や法制度の変遷を見据えた、ダイナミックな御発表であった。「読む」ことは、切実な問題として、今を生きることと繋がっている。研究するとはどういう事なのか考えさせられた。お町の「癩」として描かれる精神状態もまた、現代の心の病と重なると感じた。

次は、笹尾佳代氏「肖像」へのまなざし―鏗尾清方『一葉』の位相―であった。笹尾氏は、清方が紀元二千六百年奉祝展を意識して、一葉随筆「雨の夜」をもとに一葉像を描いたことを述べられた。そして銃後の女性たちが、教科書の定番教材であった「雨の夜」を想起し「寂しさ」「心細さ」を重ねていたが、それらは国威発揚の場にふさわしくないものとして隠蔽されていたと論じられた。絵画と文章が一体として受容される様子、発表当時の受容のありかたを、多くの資料を使って論じられた意欲的な御発表であった。

質疑にもあったように、清方『一葉』も「戦意高揚」に使われたことになるのだろうか。別の質問で、同じ場に発表された他の絵画との差異についての指摘もあった。その差異から、当時においても「戦意高揚」とされる点が多かったかということも探ってみた。

山本欣司氏の御発表は、「『にこりえ』

え』再考―映画『にこりえ』を補助線として―であった。今井正監督の映画では、お力は特別な酌婦ではなく、他の酌婦と同じ日常があることが映し出されていると指摘された。そして冒頭の手紙について先行論を検証し、お力が結城に語った思い出話を、現在の苦悩を棚上げするための過去の前景色と位置付け、弱い酌婦としたお力が描かれていると論じられた。映画と小説を同時に扱われたことに興味を持った。映画がなぜお力の日常を強調したのか、今井正の解釈や時代背景についても伺ってみたいと感じた。

三つの御発表を伺いながら、現代社会と関わりつつ、またジャンルを交流しつつ、一葉文学はこれからも様々に読み直されていくと感じた。(塚本章子)

四本目の発表は、水野亜紀子氏「三夜」の構成―《つとめ》を視座として―。「十三夜」の真骨頂を、制度の中で呻吟する女性を描くことに見るのではなく、お関が積極的生きる転機を掴むところに見い出すという趣旨。独自の見解が提出され、興味深く伺った。お関が「つとめ」の意識を捉え直す転機について釈然としないものが残った。つとめを放棄した録の助の生き方に醜さを感じ、己を支えるよすがとしての《つとめへの意志》の重要性に気づく、ということだが、根拠として挙げられている「色も黒く見られぬ男」「如何にも浅ましく身の有様」という録の助に対するお関の述懐を、「否定的」という言葉で簡単に断じてよいものなのだろうか。また、録の助はつとめを果たさず破壊に向か

うという生を意志的に自らに課し、その意志が彼を支えているとも読める。録の助の存在は、お関に転機をもたらす踏み台としての意味しか持たないのであるか。日記の記述を根拠に、一葉は自らのつとめを知り、それを能動的に実践に移す人、との指摘があったが、その一方で作中につとめを意志的に放棄する人物を描く、その根底に何があるのか。そのあたりの踏み込んだ考察を聞きたかった。

最後の発表は、佐伯順子氏「コンタクト・ゾーン」における女性主体―『にこりえ』と『ラマン』―。『にこりえ』(1896)と『ラマン』(1904)という、書かれた場所も時代も異なる「女の語り」における「共通性」を提示し、その意味を考察するというもの。「貧困と性の商品化」「狂気と病氣」等の共通項を掲げ、両作品や作者の発言から該当箇所を抜き出して並列で提示していくという手法は大雑把な印象を拭えず、「家父長制社会の孤児であり抗議者である女性作家であることが、両者の作品に似たような表現を生み出す」という結論ありきで組み立てられているように見えた。抑もこの二作についてそれほど「共通性」を主張できるものなのか、という点が疑問であった。共通項として示されたものには、一葉と同時代に、透谷や鏡花

ら男性作家たちの著述の中でも追究されているテーマがある(会場からは、荷風や谷崎の作品にも見られるのは、との指摘があった)が、そういった点への目配りが発表資料に於いては見られず、男性作家の描き方との比較などが示されていないため、『にこりえ』と『ラマン』の共通項としてそれらを括り出す意義や、またその由来

を(女性作家の表現)というところに求められるのか、といった部分が不鮮明であった。また、「狂気の由来」に於いて、女性の可能性が抑圧されることと、経済的自立が困難であることの二点を挙げていたが、確かに一葉に於いてそういった要素は認められるにしても、『にこりえ』のお力の心の動きにそれをそのまま当てはめられるのか。作家と作中人物の距離を測っていくということをしないうと、作家、作品の魅力や特色はかえって見えにくくなるように思われた。何より作品の読みや作家についての解釈の肝心な部分で、先行研究を引いて済ますのではなく、佐伯氏自身の見解をもっと聞きたかった。

(峯村至津子)

二〇〇九年度春季大会印象記

2

関西支部は今年創設三十周年を迎えた。今回の関西支部春季大会では、その節目に当たる年の記念事業の一つとして、草創期からの歴史を振り返る試みである「文学史研究における継承と断絶」―関西支部草創期から見返す―シンポジウムを開催した。パネリストには、関西支部発足の創設メンバーである谷沢永一氏と、関西支部二十周年の際、記念講演をされた平岡敏夫氏の、関西支部に関係が深い両氏を迎えた。両氏の発題題目はそれぞれ、谷沢永一氏は「文学史研究の発想」、平岡敏夫氏は「文学史研究における継承と断絶」―関西支部30周年のテーマに寄せて―であった。

谷沢永一氏は、敗戦の年、中学四年

の時に中野重治『齋藤茂吉ノオト』を見つけて読んでみたところ、緒言に反して中野重治が「茂吉の発育史」について述べていないことが、齋藤茂吉を勉強しようとしたきっかけであり、同人雑誌を経て関西大学「国文学」に掲載した最初の研究が認められるまで数十年を要した自身の経験を述べた。この経験を踏まえ、評価されないことに堪えていくことが研究には必要であること、すぐに読者の反応がなくても論文を書くのに若すぎることはない、何を書くかをつかんだらその時に書くことを力強く述べられた。歴史に埋もれている事象を掘り起こし光を当てる姿勢など、長年近代文学研究に携わってこられた氏ならではの経験談や研究姿勢に触れることは、後の世代にとって研究遺産の継承の必要性を認識するよい機会であった。

平岡敏夫氏は、谷沢永一氏も触れていた、昭和五十一年五月十五日大妻女子大で開催された日本近代文学会春季大会のシンポジウムに端を発する「方法論論争」について述べられ、昭和四十年代は作品論の時代として捉えられているが、実際には文学史にかかわる著述が引き続いていくことを指摘された。「昭和四十年代は質量共に作品論の盛り多い時期であった」と教えられた者にとって研究史観を捉え直す必要性を感じた。『ある文学史家の戦中と戦後』では、勝本清一郎・三好行雄・前田愛を挙げ、それぞれの論者における、自身の戦中の記憶を胸に、戦後の近代文学研究を形成してきた道のりと姿勢について述べられた。戦後文学が戦争の記憶と切り離せないと同様に、戦後の近代文学研究も研究者自身の戦争の記憶が原点にな

っていることに視野が開かれた。ディスカッションも、フロアーから「方法論論争」当時の状況が述べられたり、現在の研究状況をどのように捉えるかなどの質問があり有意義だったが、より若い世代、現役の学生・院生からの意見感想をもう少し聞きたかったと感じた。

(宮園美佳)

「時宜を得た企画」

この三月まで、本務校の雑事に追われることが多くて支部大会にはなかなか参加できなかった。今年の春季大会に参加し、日本近代文学会関西支部創立三十周年記念企画(シンポジウム)「文学研究における継承と断絶」を聞いて久々に学術的刺激を受けられた関西支部創立準備会を懐かしく思い起こしたりもした。会場を見わたすと、随分懐かしい「高齢の方々のお姿もちらほらお見受けしたが若い世代の人たちが多く、支部創立の頃は自分自身がそのような世代でもあったのだなあと、定年後の身として感慨深いものがあった。

シンポジウムは副題に「関西支部草創期から見返す」とある。今日もなお盛行している作品論・テキスト論と深くかかわるかつての「方法論論争」は、文学研究方法をめぐって戦後になされた最後の(以後は次第に国文学界の熱気は減退したのだろうか?)大きな論争だったように思うが、関西支部はその論争の終息期に近代文学研究のひとつの転回点の中で創立されたのだという認識に立つて企画と開く。既述のとおり当日は比較的若手の

方々の出席が多く、会場で配布された浅野洋支部長作成のリスト「関西支部創設期と「方法論論争の周辺」」は、論争関連文献がコンパクトに整理されていて、直接当時の学会の雰囲気に触れておられない人々にとっても、非常に的確な資料だったように思う。

ところで、方法論論争が喧しい時期に私も身を置いてはいたのだが、文学研究における方法や作品への態度などというものは対象作品の内実に規制され、研究主体たる自らの問題意識に即してその都度方法・態度は選り取るべきであり、固定的にあらゆる作品に有効な万能薬的方法・態度などというものはありえないと確信していたから、論争に影響されることは無かった。したがって谷沢永一氏がこのたびの基調報告の中で雑書の意義について語られ、また方法はあっても方法論などというものはないのだという従来の立場を強調されるのを共感しつつ拝聴した。しかし考えようによってはそれこそが谷沢流の方法についての論でもあるのだろう……。付言すれば、雑書中の情報の価値を吟味し、その情報の妥当性、その情報の価値を認力だということだろう。

一方平岡敏夫氏は、支部二十周年に際して「夕暮れ」の文学史」をご講演いただいた以来で、「あれから十年かあ」という感慨とともに拝聴した。平岡氏は、方法論論争時の一方の雄たる三好行雄氏が必ずしも「方法論」論者一辺倒ではなかったのだと、前田愛氏をもちからめる形で強調しておられた辺りに、また論争期の諸説の整理をされるにとどまり谷沢氏の挑発をさりげなくかわされた辺りに、すでに作

品論・テキスト論の季節が終息期を迎えているらしいという印象を強くした。つきには何がハヤルのやら……。 (浅田隆)

★研究会紹介

主に関西で行われている研究会について、以下の項目順で紹介します(順不同)。

- ①会の名称
- ②代表者または事務局等、連絡先の氏名・住所・電話番号等
- ③希望者のための入会案内
- ④その他注意事項

①阪神近代文学会

②事務局 〒698-0001 神戸市東灘区森北町6-2-23 甲南女子大学文学部 信時哲郎研究室内

<http://www.soc.ni.ac.jp/hanshin/index.html>

③阪神近代文学会は、大学院生を育てるために阪神間の大学の交流を積極的に行い、先生方も模範を示して良い発表をしていこうということで始まった会です。夏冬2回の大会を開催するほか、年に1回、機関誌(「阪神近代文学研究」)を発行しています。大学の所在地に関係なく、門戸を広く開放していますので、大会へのご参加、学会へのご入会を心よりお待ちしております。

①芥川龍之介研究会

吉岡由紀彦方

③本会は、一九九八年、出身・所属大学の枠を超えて、芥川龍之介とその文学について研究すべく、関西在住の院生・研究生・大学教員を中心に発足されました。現在の例会参加者数は、十〇十五名ほどです。

芥川以外の近代作家や、さらに外国文学・比較文学を専門とする方も参加して下さっています。

年二回(年末Ⅱ大学の冬休みと夏休み)、土曜日に大阪市内で「例会」Ⅱ「研究発表会」を開催しています。

「例会」は大阪で開いています。関西以外からも参加されています。そのため、発足当初から数年間は「例会」を春夏秋冬の年四回開き、三年ほど前からは回数を年二回に減らし春と秋に開催していましたが、地方の大学教員の方も参加しやすいように、「年二回開催」はそのまま「冬休み(十二月か一月)と夏休み(七月下旬から九月上旬)」の開催に変更しました。

また、参加者の専門や研究対象の多様化をふまえ、発足主旨の「芥川龍之介とその文学について」も、五年ほど前から「芥川龍之介とその文学を中心とした日本の近現代文学について」と、「あまり芥川にこだわらない」方向に変更しました。

なお、現在、「入会費」「会場費」「通信費」の類は頂いておりません。ただ、遠方からご参加いただく場合、交通費は各自で(負担下さるようお願いいたします。

最後になりましたが、当会では「入会(参加)資格」などは設けておりま

せん。「愛好会」ではなく「研究会」である事をご理解いただければ、どなたでもご参加いただけます。

例会参加希望の方は、事務局宛にe-mailかFAX、往復葉書等で連絡下さい。追って「例会案内」を発送させていただきます。

④これまでの「発表題目、発表者、会場等」については、当会のホームページ、「國文學」「学界教育界の動向」「文学・語学」「彙報」、「いざみ通信」一催し、研究会、同人誌などの「案内」欄を参照下さい。ホームページのURLは、
http://www.geocities.jp/bookend_ryunosu
ke5569/

です。メールアドレス・FAX番号をお教え頂ければe-mailかFAXで年二回の「例会案内」を送らせて頂きます。なお、当会では、経費を抑えるため葉書など郵送による例会案内は送っておりません。

①論潮の会

②代表者 山崎正純・木村小夜

③、④ 同人規約等、詳しくは、論潮の会のホームページ
(<http://ronchou.moo.jp/>)をご覧ください。

①京都漱石の会

②代表 丹治伊津子 上603-8341

③「京都漱石の会」は文豪夏目漱石の人と作品を研究者のみならず広く一般の方々とともに、その足跡をたどり、思考し、顕彰する会として発足しました。漱石は生前四度にわたって入浴し、「漱石文学」に多大な

足跡を残しています。さまざまな角度から語り合って研究を続けてまいります。

★会員の業績

(凡例)

著書名：『 』

論文名：「 』

掲載紙誌名：『 』

注記等：()

※関西支部会員の業績のうち、〇七年四月から〇八年三月までに発表されたものを収録した。

※各業績に付した番号のうち、①は単行本、②は雑誌・単行本等収録論文、③はその他(研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等)を示す。なお、①は書名・出版社・発行年月の順、②は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順、③はタイトル・掲載書(発表会名)・発行年月(日)の順で記した。

※掲載紙誌の巻号数は省略し、雑誌・単行本は発行年月のみ、新聞・会報等は発行年月日を記した。

※原則として、その他業績の種類、執筆項目等の詳細、編者名・発行所名等は会員の届出に記載のあったもののみを記した。

※著者名・論文名・掲載紙誌名の用字は、会員届出の記載に拠った。

ア行の部

青木亮人

②「三森幹雄と正岡子規の『眼』―明治俳諧における『写生』の位相―」『日本近代文学』〇八年五月

②「芭蕉 俳人としての誇り」『俳句研究』〇八年六月

②「明治「月並」の句法」『俳句研究』〇八年十月

②「明治旧派の蕪村言及記事紹介(一)―『大阪俳句研究会会報』〇八年十月

②「『感念』のありか―明治二〇年代における俳諧矯風運動―」『同志社国文学』〇八年十二月

②「『新興』スケート・リンカー」『京大俳句』〇九年三月

②「『京大俳句』のスケート句」『俳句研究』〇九年三月

②「『月並』の季重なり―明治俳諧の類型から―」『アトリリサーチ』〇九年三月

③「俳諧いまむかし」『氷室』〇八年四月〜連載中

③「あの頃、俳句は」『円虹』〇九年一月〜連載中

③「柿衛賢」『神戸新聞』〇八年五月二九日

③「西洋と俳句の衝突―明治心理学と正岡子規について―」第十七回柿衛賢記念講演(於柿衛文庫)〇八年六月八日

③「明治の子規」『子規新報』〇八年九月

③「テークオフ ユニークな俳句学研究」『朝日新聞』〇八年九月六日

③「山口誓子のスポーツ俳句について」第三四回空の会(於OCATビル、

難波生涯学習センター）〇八年九月七日

③「明治の子規（続）」『子規新報』

〇八年十一月

③「詩学」『詩と批評』分担執筆『戦後詩誌総覧』二巻 日外アソシエーツ

〇八年十二月

③「ユリイカ」分担執筆『戦後詩誌総覧』三巻 日外アソシエーツ 〇九年一月

③「歴史としての「写生」・実感としての「季語」」『翔臨』〇九年二月

③座談会「第四回島原」『蕪村忌』大句会

③「俳句研究」〇九年三月

③「写生」と心理学―正岡子規の「連想」を手がかりに―『かきもり友の会』〇九年三月

明里千章
①「村上春樹の映画記号学」若草書房 〇八年十月

②「作家と映画 谷崎潤一郎」『國文學』〇八年十二月

②「旧道徳を超えて―「鍵」の今日性」『谷崎潤一郎 境界を超えて』笠間書院 〇九年二月

池田啓悟

②「交錯する（社会主義）―中條百合子「ズラかった信吉」論―」『論究日本文学』〇八年五月

②「宮本百合子」の生成―中條／宮本百合子「小祝の一家」論―『昭和文学研究』〇九年三月

③口頭発表「矛盾の共存―宮本百合子一九三〇年代作品の諸相―」日本近代文学会関西支部二〇〇八年年度秋季大会 〇八年十一月

岩見幸恵

③「主要文献目録」『松本清張事典増補版』勉誠出版 〇八年五月

③「「サザエさん」の親子の愛憎―磯野家創造―」『親と子の愛と憎しみ』勉誠出版 〇八年十一月

③「村上元三」『滋賀近代文学事典』和泉書院 〇八年十一月

梅本宣之
②「中島敦文学におけるアナトール・フランス受容―補遺―」文字稿を中心に―『帝塚山学院大学 日本文学研究』〇九年二月

大橋毅彦

①共編著『上海ゴッホ1955 武田泰淳 上海の蜚』注釈』双文社出版 〇八年六月

②「彷徨える木版画集『黄包車』―上海亡命ユダヤ人の芸術活動再検討のために―」『港（ナマール）』〇八年十一月

②「鳥其山・Jyouun・上海ゴット」『横光利一研究』〇九年三月

③項目執筆「山犬・山犬統編」『女の図』「復讐」『室生犀星事典』鼎書房 〇八年七月

③口頭発表「戦時上海における日本の文化統治と帝国主義的言説構築の中を走る無数の力線」改造社を中心とする20世紀日本のジャーナリズムと知的言説をめぐる総合的研究』第9回研究集会 〇八年七月

③口頭発表「鳥其山・Jyouun・上海ゴット」横光利一文学会第9回研究集会 〇八年八月

③書評「文学者の始動告げる書『堀田善衛上海日記 滬上天下一九四五』」

『産経新聞』〇八年十二月十四日

カ行の部

木村小夜

②「『夢十夜』の錯誤―「第二夜」と「第六夜」―」『福井県立大学論集』〇九年三月

③「研究動向 小川未明」『昭和文学研究』〇八年九月

③「読み継がれた六十年」『〈図録〉太宰治 三鷹からのメッセ―』没後六〇年記念展―』〇八年十一月

③「斎藤栄」『西条八十』『滋賀近代文学事典』和泉書院 〇八年十一月

③「太宰治「魚服記」と上田秋成「夢応の鯉魚」―日本近代文学会北陸支部大会 〇八年十二月

③「関係の物語としての聖書受容―山岸外史―人間キリスト記」から「駈込み訴へへ―」日本キリスト教文学会関西支部大会 〇九年一月

木村洋
②「明治中期、排斥される馬琴―松原岩五郎の事例をめぐって」『日本文学』〇八年六月

②「経世と詩人論―徳富蘇峰の批評活動」『国語と国文学』〇八年十月

②「平民主義の興隆と文学―国木田独歩「武蔵野」論』『日本近代文学』〇八年十一月

工藤哲夫
②「チェンダはどこから来たのか」『賢治研究』〇九年三月

熊谷昭宏

①日本近代文学会関西支部編『近代文学のなかの「関西弁」―語る関西ノ

語られる関西』和泉書院 〇八年十一月

③「『詩学』（詩学社）第13巻第1号（第14巻第14号）―戦後詩誌総覧②』

和田博文・杉浦静編 〇八年十二月

③「ユリイカ」第4巻第11巻第6巻第4号―戦後詩誌総覧③』和田博文・杉浦静編 〇九年一月

小林幹也
②「想像力が飛翔するとき―後藤明生『麻呂良城』論―」『近畿大学日本語・日本文学』〇九年三月

③「あきらめながら、満ち足りる（三枝昂之第十歌集『世界をのぞむ家』書評）―『玲瓏』〇九年一月

③「私と聖書と大学院時代」『混沌』〇九年三月

サ行の部

佐藤秀明

②「「美神」論」『解釈と鑑賞』〇八年七月

②「活動写真のまなざし―牧野信一―西瓜喰ふ人」の一人称』『文学』〇八年九月

③「翻刻・「豊饒の海」創作ノート③」（共編）『三島由紀夫研究』鼎書房 〇八年七月

③「座談会①一人称という方法」（猪狩友一・鈴木啓子・日比嘉高・佐藤秀明・司会安藤宏）『文学』〇八年九月

③「翻刻・「豊饒の海」創作ノート④」（共編）『三島由紀夫研究』鼎書房 〇九年二月

真銅正宏

②「文学者の表現―日本人旅行者の

見たイタリアー」『立命館言語文化研究』〇八年十一月
②「女性の視線——日本人旅行者の見たイタリア(3)——」『人文学』〇九年三月

②「伏流するフランス——日本オペラの夢の背景——」『文学』〇九年三月
②「パリと東京をめぐる「文学」——永井荷風の墓参を例に——」『マルク・ブロック大学・同志社大学学術交流シンポジウム 伝統の発見 フランスと日本』同志社大学国際連携推進機構 〇九年三月 日本語およびフランス語

③「書評『31音青春のこゝろ2007——SEITOU百人一首の世界——』」『同志社時報』〇八年四月
③「宮本輝『新装版 こゝに地終わり海始まる』(上・下) 「解説」 講談社文庫 〇八年五月

③「座談会」『31音青春のこゝろ2008——SEITOU百人一首の世界——』同志社女子大学編 NHK出版 〇八年九月
③「文学作品にみることばと心」井上智義編『誤解の理解』あいら出版 〇九年二月

③「現代語訳または翻訳で『源氏』を読むとはどういうことか」『国際シンポジウム2008報告書 源氏・ゲンジ・GENJI——源氏物語の翻訳と変奏——』同志社大学院文学研究科 奥付なし

③口頭発表「パリと東京をめぐる文学——永井荷風の墓参を例に——」同志社大学——マルク・ブロック大学学術交流シンポジウム分科会3「日本学における伝統の発見」(於同志社大学) 〇八年九月二日
③口頭発表「散策記という文学ジャン

ル——永井荷風「日和下駄」と東京——」『ブラジル——日本国際シンポジウム「都市の近代化と現代文化」(於サンパウロ、ラテンアメリカ記念ホール) 〇八年十月十日(十一日)

③口頭発表「現代語訳または翻訳で『源氏』を読むとはどういうことか」『国際シンポジウム「源氏・ゲンジ・GENJI」(於同志社大学) 〇八年十二月二十日

③口頭発表「イタリア「観光」の性格とホテル——イタリア旅行関係記事のPDFファイル化を通じて——」シンポジウム 海外における日本文学の(時空間)——比較文化研究とデジタル・ヒューマニティーズ——(於立命館大学) 〇九年三月十四日

夕行の部

丹治伊津子

②「漱石が書いた紹介状「漱石夫人の歯に衣着せぬ」と言」『虞美人草』「京都漱石の會」会報 〇八年四月十二日
②「漱石の女弟子 藤浪和子」『虞美人草』「京都漱石の會」会報 〇八年十月二五日

外村彰

①編著『高祖保書簡集 井上多喜三郎宛』龜鳴屋 〇八年五月
①共編著 日本近代文学会関西支部 滋賀近代文学事典編集委員会編『滋賀近代文学事典』和泉書院 〇八年十一月

②「室生犀星の詩と庭——つち澄み」の美意識——『論究日本文学』〇八年五月
②「晶子とかの子——晩年の歌から——

『ポトナム』〇八年七月
②「人生を観る態度 内田百閒「漱石雑話」——上田博・池田功・前芝憲一編『小説の中の先生』おうふう 〇八年九月

②「岡本かの子と(京都)——旅の所産と古典受容から——」『佛教学総合研究所紀要別冊』〇八年十二月
③「高祖保書簡集 人文・社会科学編」〇八年六月
③「川蝦」『植物物語』「山河老ゆる」——木枯——「名園の焼跡」『京都』葉山修平監修『室生犀星事典』鼎書房 〇八年七月

③「高祖保書目稿」『滋賀大國文』〇八年七月
③「新資料 詩『ピーター・パン』、短歌、俳句、序文ほか」『室生犀星研究』〇八年九月

③「犀星俳句の興趣」『室生犀星研究』〇八年九月
③「新しい短歌鑑賞第二巻 正岡子規 斎藤茂吉 安森敏隆 内藤明著」『同志社時報』〇八年十月
③「井上立士年譜・書誌稿」『佛教学総合研究所紀要別冊』〇八年十二月

③「詩人・大野新の『歩道』時代の短歌」『ポトナム』〇九年三月

友田義行

②「安部公房『燃えつきた地図』における映画的手法——勅使河原宏との協働を媒介に——」『昭和文学研究』〇八年九月

③口頭発表「沖繩戦の記憶と現代——目取真俊「平和通り」と名付けられた街を歩いて」『試論——日本史研究会戦争展文化企画』〇八年八月
③講演「映像は思想を表現できる

か?」立命館土曜講座第二八七一回 〇八年十月
③口頭発表「顔の加工/仮構——安部公房/勅使河原宏「他人の顔」論——日本近代文学会二〇〇八年度秋季大会 〇八年十月

③デイスカッサント兼司会「格差社会と文学——弱きものとしての子供——立命館大学国際言語文化研究所連続講座 〇八年十一月
③研究ノート「沖繩戦の記憶と現代——目取真俊「平和通り」と名付けられた街を歩いて」『試論——日本史研究』〇九年一月

③口頭発表「映像論争試論(1958-1960) 日本映像学会関西支部第五六回研究会 〇九年三月

③翻刻提供「砂の女(映画のための梗概)」他人の顔(仮題) 『安部公房全集 第三〇巻』新潮社 〇九年三月

ナ行の部

永瀧朋枝

②「藤村『処女地』に執筆した女性作家達(二)——加藤みどり、島崎静子、鷹野つぎ、若杉鳥子——」『神女大國文』〇九年三月
③口頭発表「透谷『鬼心非鬼心』の時代」北村透谷研究会全国大会 (於キヤンパスブラザザ京都) 〇八年六月七日
③「中川正文」『滋賀近代文学事典』 〇八年十一月

西村好子

②「『普請注』論——語り手という視点から——」『近代文学研究』〇八年四月
②「森鷗外『我百首』論——津和野派国文学と乙女峠事件をめぐる——」『文化

／批評』〇九年三月

野田直憲

- ②「芥川龍之介「奉教人の死」の可能性——流布本文が糊塗したもの——」(二)『日本語文化研究』〇九年二月

信時哲郎

- ③項目執筆「北村想」「中上健次」「山上伊太郎」「滋賀近代文学事典」和泉書院 〇八年十一月

ハ行の部

花崎育代

- ②「三島由紀夫『金閣寺』——鳳凰を夢みた男——」『三島由紀夫研究』〇八年七月

- ②「『関西弁』からみる大岡昇平の文学」『近代文学のなかの『関西弁』——語る関西／語られる関西——』日本近代文学会関西支部編 和泉書院 〇八年十一月
- ③口頭発表「『関西弁』からみる大岡昇平の文学」二〇〇八年度日本近代文学会関西支部春季大会特集企画「『シンポジウム』近代文学のなかの『関西弁』——語る関西／語られる関西——」〇八年六月十四日(於・花園大学)(上記論題による研究発表およびシンポジストとして発言)

林信蔵

- ②「日本の西欧化、カフェの日本化——永井荷風の文学表象を中心に——」『比較文化研究』〇九年三月

ヤ行の部

山田哲久

- ②「井上靖「姨捨」論——(棄老譚)からの飛躍——」『同志社国文学』〇八年十二月
- ②「井上靖「漆胡樽」論——(歴史)への態度——」『同志社国文学』〇九年三月

ワ行の部

和田芳英

- ②「レフ・トルストイと昇曙夢」『日本ロシア文学会関西支部会報』〇九年四月
- ③「レフ・トルストイと昇曙夢」日本ロシア文学会関西支部(於大阪コンシウム、キャンパスポート大阪) 〇八年十一月
- ③講演「ロシア文学(ロシア学)の蘊奥を究めた昇曙夢——トルストイの総合的研究」第10回「トルストイを語る会」日本トルストイ協会 〇八年七月二日
- ③ラジオ出演「ロシア文学者昇曙夢を語る」奄美FM 〇八年八月三二日

- ②「『生命主義』言説圏から生成される詩——文芸誌「生活者」に発表された中原詩の特質をめぐって——」『國學院雑誌』〇八年六月
- ②「(『觀光』・『自殺』・『恋愛』——中谷孝雄「春の絵巻」に表象された(京都)——」『佛教大学総合研究所紀要別冊 京都における日本近代文学の生成と展開』〇八年十一月
- ②博士論文「中原中也研究——メディアの要請に応える詩——」佛教大学 〇九年三月

年三月

- ③「宇野健一」「梅林貴久生」「太田活太郎」「福井和」「前田夕暮」「乾由明」「山崎隆朗」『滋賀近代文学事典』和泉書院 〇八年十一月

渡部麻実

- ①「流動するテキスト 堀辰雄」翰林書房 〇八年十一月
- ②「山本有三『真実一路』——転覆する社会通念——」『国文学 解釈と鑑賞』〇八年六月
- ②「木内錠「他人の子」——ヒロインの不可解な笑い——」『国文学 解釈と教材の研究』〇九年四月
- ③「詩人・堀辰雄」「片山広子」「中里恒子」「堀多恵子」「堀辰雄」「丸岡明」葉山修平監修『室生犀星事典』鼎書房 〇八年七月
- ③口頭発表「『幼年時代』のフィクションナリゼーション」室生犀星学会秋季大会 〇八年十月

事務局から

○維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしく願います。

○本年度春季大会のブックレット『支部創設30周年記念・シンポジウム 文学研究における継承と断絶——関西支部草創期から見返す——』が和泉書院から今秋刊行されます。関西支部三十年史も合わせて収録されます。ご期待下さい。

☆関西支部公式ブログ

<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~kansai-amjs/>

URLが変更になりました。お手数ですが、リンクやブックマークの変更をお願いします。
旧公式ブログの更新は停止し、八月三日をもって閉鎖することになりましたので、ご注意ください。
今後はこちらのブログに日本近代文学会関西支部に関する情報を掲載していきますので、よろしく願います。

日本近代文学会関西支部会報 第十三号
二〇〇九年八月三十日発行
発行者・浅野洋(支部長)
発行所・日本近代文学会関西支部事務局
〒577-8502 東大阪市小若江三―四―一
近畿大学文学部 佐藤秀明研究室内